OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カルテシアーナ　第1号　彙報/あとがき
Author(s)	
Citation	カルテシアーナ. 1997, 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66873
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

彙報

昭和五一年度哲学哲学史第一講座論文題目

学部卒業論文

ベルグソンの『笑い』について　岩谷　勝
デカルトにおける思惟と存在について　庫元正博
スピノザ哲学における神＝自然＝実体について　平等文博
プラトン『国家』における教育論　森　泰一
デカルトの「情念論」と彼の道徳論の展開について　山本二郎

修士学位論文

ベルクソン哲学における知覚の問題について　中田輝美
M・メルロー・ポンティにおける客観性の問題　中本泰任
「心的なもの」の人間的意味
——初期サルトルにおける疎外の論理——　三宅祥雄

あとがき

大阪大学文学部哲学哲学史第一講座は講座創設の澤瀉久敬現名誉教授以来、フランス哲学の研究を主とする講座としてユニークな地位を占めてきた。昭和29年から大阪を中心に活躍しているフランス哲学研究会もその事務所をこの講座に置いている。講座学生の研究テーマは必らずしもフランスに限らず、プラトンもあればスピノザもあるが、やはりデカルト、ベルクソン、サルトル、メルロ・ポンチらが多い。かような特色を受けつぐため、今度講座博士課程学生、教官の研究発表の場として出す雑誌の名を、ごらんのように Cartesiana とすることにした。大それた名だとは思ったが、この偉大な先哲にあやかりたいとの切なる気持を諒とされたい。

かような雑誌名にしたからといって、デカルト学派の研究に内容が限られるのではもとよりない。デカルトは言うまでもなく近世哲学の祖であり、近代科学の創始者の一人である。彼が手がけたことは哲学と科学のほとんどの領域に関係する。アリストテレス・ソサイエティ、カント・アーベントがアリストテレス哲学、カント哲学の研究に限られないように、われわれのカルテジアーナも、デカルト哲学、フランス哲学に限らず、あらゆる哲学に広く目を開いてあるべきである。フランス哲学そのものが哲学として既にすべてに目を開いているものである点からいって、このことは当然である。あらゆるものに目を向けつつ講座の特色を求めてかような雑誌名にしたまでである。

（三輪）